

CHOSHI (第3話)

押見は入試広報部長だったので、5月～10月は近隣の中学校に清真の高校入試を説明する、いわゆる『外回り』の時期だった。

6月は銚子の中学校を回っていた。銚子大橋を渡ると、いつもたくさんのかもめが迎えてくれる。銚子は東日本屈指の港町だ。駅近くにある旧銚子四中の銚子中を訪問し、その後銚子三中、銚子一中と訪問した。

銚子三中と銚子一中の間には『銚子市野球場』がある。私は時間調整のため『銚子市野球場』に寄った。銚子の野球と言えば、昭和48年の作新学院の江川卓との2回戦があまりにも有名だ。怪物と言われた江川卓は1回戦の柳川高校戦で23個の三振を奪い、2回戦で銚子商業と対戦した。銚子商業のエースは2年生の土屋投手。1年生には後に巨人で活躍する篠塚選手がいた。この試合の幕切れは、雨中の延長12回、江川のサヨナラ押し出しで銚子商業が勝った。最後の1球はボールになったが江川卓自身『高校時代、最高のボールだった。』という伝説のゲームだ。銚子商業は翌昭和49年、3年生になった土屋投手、名将斉藤監督により全国優勝を成し遂げた。銚子市民の『大漁旗』による応援は、全国的にも有名になり、銚子商業打線は『黒潮打線』と恐れられた。故水嶋新司さんの漫画『球道くん』にも銚子商業をモデルとした学校が登場した。『銚子市野球場』は野球の街、銚子の象徴的な場所だった。

銚子一中に行くと、玄関にたくさんの優勝旗が飾ってあった。まだ時間があるのでしばらく見ていると、かなり昔のものもあった。昭和60年、50年、40年……、銚子一中野球部は昔から強かったんだなと見入っていると、後に見知らぬお爺さんが立っていた。

私はお爺さんに声をかけた。『すごいトロフィーの数ですね。銚子一中の野球部は昔から強かったですね。』するとお爺さんは『そうだよ。俺が中学の頃は、斉藤先生が監督をしてそりゃ強かったよ。』と教えてくれた。『斉藤先生って、あの銚子商業で全国優勝をした斉藤監督ですか。いつ頃の話ですか。』

『いつ頃かな。俺が中学校の時だから。その時に、銚子商業の応援に甲子園に行ったんだよ。あの頃は街中が応援に行ったよ。あの時の銚商もいいピッチャーがいてよ。強かったよ。』

『そのピッチャーってプロで活躍した木樽投手ですよ。知っています。その時、応援に行かれたんですね。』すると、お爺さんはこう答えた。

『違うよ。もちろん木樽の時は準優勝したけど。俺が甲子園に行ったのはもっと前。確かピッチャーは……藤本、藤本さんの時だよ。』

僅かな時間だったが、銚子の野球の歴史の奥深さが感じられた。目の前にある銚子一中のたくさんの優勝旗が、静かに語りかけてくるようだった。